

どのような基準で学業成績の結果を出したか。 【人文社会科学系】

- ・授業内での発言内容。
- ・プレゼン。
- ・筆記試験。

テスト50、班ごとのレポート50だが、欠席が多いと減点していく。4回欠席でD。班ごとのレポートは、どこを分担したかを明記してもらい、個々の仕事をきちんと評価できるようにしている。

学期末に行った筆記試験と出席状況

出席、小テスト、課題、期末テストを総合して行いました。

学生が独自に調べ発表する態度・レジュメの内容と、学生同士の質疑応答及び教員からの指摘によって、どれだけレポートとしてまとめ上げることが出来たか、の両面を総合して評価した。

- ・授業への出席、発言、発表の水準を踏まえて成績をつけた。
- ・ほとんどの受講生は極めて良質であったので、素直に高水準の成績を認めた。

授業時に興味を持ったことについての詳細な調査を行ったレポートの提出(70%)。綿密な調査・広範囲なアンケートを行い、データの収集が充実していたものを評価した。さらに授業後に提出する課題の取り組み具合(30%)とし、毎回の授業に対する理解度を測定した。

授業ではまず文法の復習を行った。そして文法の小テストを行った。またゾフィー・ショルの「白バラ」を抜粋で講読し、中級ドイツ語の講読練習を行った。そしてこれについても小テストを行った。またトーマス・マンの「ドイツとドイツ人」の抜粋を読み、これについても小テストを行った。このように計3回の小テストのほか、映画の感想文、出席点なども考慮し、総合的に判断した。

国文学講義AⅡについては、原則試験(持ち込み不可)で評価している。国文学演習CⅠは、発表内容(70%)と授業の参加度合い(30%)によって評価した。

学生が授業の目的、到達目標をどれだけ達成できたか、主体的、能動的、自律的に授業に関わることができたか、授業の成果、課題等と省察できたか、また、それをもとに新たな課題をもつことができたか。他の学生と協働的に学修を進めることができ、協働による学ができたか、発表、課題、レポート等にこれらの成果を適確に表現できたか等を評価する。
これらのことが把握出来るように、授業では、毎回小課題を与え、レポートを提出させている。また、発表等では、発表者(グループ)に対して、フィードバックシートを作成して、意見やコメントを書かせている。それを発表者に渡したり、授業で公開して、フィードバックから学んだことを発表後のレポートとして提出させている。これらを総合して評価を出している。

基本的に、授業目標に対する理解度を評価の軸とした。講義形式の授業についてはふだんの受講状況及び試験で、演習形式の授業については通常の授業への参加態度、期末に課すレポートで総合的に判断している。

試験は筆記試験形式。2人で授業を担当したので、それぞれが出題をして、その合計点により成績評価を行った。

出席、発表と質疑応答、レポートの内容の各項目について総合的に評価した。

毎回提出のワークシートを重視しており、現代社会の抱える諸問題について自分なりの意見をもち、それを文章で的確に伝えることができたかどうかを基準にして評価した。最終的には、シラバスに記載したとおり、レポートと合わせて成績評価をつけた。

課題発表20%、自由発表30%、レポート30%、授業参加20%とし、主体的な取り組みを重視した。

出席・問題への解答・授業参加50%、期末筆記試験50%とし、知識理解を重視している。

外国語演習Ⅲは、次のような基準であった。

授業での発表 30%、授業中・授業外での課題・宿題など 40%、授業への積極的な参加 30%
音声学は、「出席(30%)と小テストなどのパフォーマンス(70%)で評価する」とした。ほぼ毎回、何らかの課題を出した。

発表25点(ほぼ全員に25点)、レポート60点、出席率15点の配点で評価した。結果は、S4名、A2名、B4名、C1名、途中放棄2名(計13名)であった。

レポートないしは発表(40点×2回)、授業内レポート(10点)、出席点10点の配点で成績を付けた。当初の予定では、全員に何らかの形で発表してもらおうつもりであったが、それができなかったため、発表者(11人)にはレポートを1回分免除するというやり方に変更した。結果は、以下のとおり。S10名、A8名、B1名、C2名、放棄1名(計22名)。

人物名や書名等の項目に関する筆記試験が40点、最終レポートが40点、発表10点(全員10点)、出席率10点で成績を付けた。レポートは英文文献の内容をまとめたものであるが、日本語として読みにくい文章は低い評価となった。また、筆記試験は、毎年同じレベルのものを出题しているが、年々平均点が下がっている。今年度の成績はいつもより悪く、S2名、A3名、B6名、C7名、途中放棄4人であった。

アメリカ文学史の理解に不可欠な用語について、正しい理解がなされたかどうかを確認する試験を50点分、残りの50点分は、実際にアメリカ文学史上の傑作を一つ、読んでもらった上で、その作品と学生自身がどうかかわったかということを探る試験とした。用語理解を得意とする学生もあれば、文学作品の理解・分析に秀でた学生もいたが、総合すれば、適当な成績分布になったのではないと思う。

- ・授業中の発言回数とその内容
- ・中間試験を2回実施することで、学生自身がどの程度理解しているかを自覚させている。また、答案用紙の返却時に模範解答を渡し、自分の解答とどこが違うのかを明らかにすることにより、採点への不信や不満を解消できるのではないかと考えている。
- ・雨温図や分布図などを書かせ、その内容を評価している。

成績評価の基準および方法は次の通りである。

- ・口頭発表とその資料(40%)…担当した作品の内容や表現、問題点を十分に理解しているか。
 - ・授業内活動(20%)…他のグループの発表へ、質問・意見等が言えるか。
 - ・くずし字の小テスト(20%)
 - ・レポート(20%)…発表と質疑応答によって得た知識や見解を、適切に応用して関心に沿った論述ができるか。
- なお、実際に提出した成績は、およそSが22%、Aが42%、Bが26%、Cが10%である。

シラバスに記載の通り、定期試験40%、二度行った小テスト30%、出席・授業への参加度30%とした。授業内容が外国語の入門であること、また、学生たちが積極的に準備してくれたこともあり、全体的に成績評価は大変よく、7割の学生が90点以上、4分の1が80～89点となった。

授業中に発表等を行わせるため、その発表の成果とその際の授業態度(質問等による参加)を半分程度評価に組み込んでいる。残りの半分は、期末の課題である。経済学基礎演習ではレポートを課した。経済政策論では試験を課した。

どれだけ講義の内容を理解しているか(すなわちそれを自分の言葉で表現できるようになっているか)、まずはこれに尽きる。

授業中の態度及び年度末試験の内容を見て、授業内容を聞いているか理解しているかをもとに評価しました。